



第2回フォーラムのお知らせ

【私の意見 8】 「民主立命だ」と誇れなくなって——
1997年3月末で退職して11年……須田 稔

【私の意見 9】 立命館の進む道……友藤 信明

《私もひとこと》 井川 定雄(元総務担当常務理事)

あなたも賛同者に！

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」世話人会は、元教職員以外の方で賛意を表しておられる方がたくさんおられ、カンパを下さったり、協力を申し出たりされることをどう扱うか、そのような方とどのように関わっていくか検討してきました。その結果、現任教職員の方は「現役賛同者(匿名扱い)」、それ以外の方は「一般賛同者」と呼ぶこととしました。今後いろいろな形で「考える会」の活動にご参加いただこうと考えています。この機会にあなたも賛同者になっていただくと幸いです。

「私もひとこと」をよせて下さい！

「考える会」では元教職員の民主主義についての「私の意見」を集め、公開してきました。今後ともそれはニュースに掲載していく予定です。同時に、もっと気軽に、近況をよせていただいたり、感じたりしておられることを「私もひとこと」という形でニュースに載せていくことにしました。「考える会」に賛同されるあなたも、この欄に原稿を寄せていただくと幸いです。

なお、前号でお知らせした新しいメールアドレスと共に、今号では「ホームページ」開設のお知らせも載せています。P.6をご覧ください。

第 2 回 フォーラム 開催 決定！！

下記日程にて組合との共催で、第2回フォーラムを開催いたします。

立命館の民主主義の現状に関心のお持ちの

元教職員、現任教職員、院生、学生の皆さん！率直に語り合きましょう。

フォーラム

【テーマ】

立命館の「これまで」と「これから」～教育研究と組織運営～

【会場】衣笠キャンパス 至徳館(旧中川会館)——401会議室

【開催日時】2008年4月12日(土) 午後2:00～4:30

【コーディネーター】佐々木 嬉代三氏(元副総長)

【問題提起】

- 井上 純一氏(元学生担当常務理事)
- 友藤 信明氏(元立命館大学学生課長)
- 斎藤 敏康氏(立命館大学教職員組合副委員長)

★懇親会：午後5:00～ 会場：カルム 会費：3000円(学生・院生無料)

※フォーラム終了後、懇親会を開催します。

今年度退職される教職員の方もお迎えし、なごやかに懇親会を行いたいと思います。

共催 「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」／立命館大学教職員組合

【私の意見 8】

「民主立命だ」と誇れなくなつて——1997年3月末で退職して11年（元産業社会学部教授）須田 稔

去年の暮れ、1965年創設年から4年間の、つまり1期生から4期生までの集まりに誘われた。自治会や学会の指導層ばかりだからか、20余人のほとんどが今日の立命館に危惧を抱いていた。

その折もだが、「先生、この頃の立命、どうなってるンですか」と問う卒業生は多い。僕はこう語るようになっている。「アンビヴァレント、愛憎相半ばするンだなあ。国際平和ミュージアムの存在と活動だけは誇りに思うンだけどね」。

活字人間だから、『報告集』で岩井先生・佐々木さん・芦田さん・稲葉さんたちの論述を読むと、あのフォーラムで聴いていた時とは格段の違いで、問題状況の核心が鮮明に迫ってくる。割り切つて考えるのが不得意という意味でもアナログ人間なのだが、事態の深刻さの真髓が明確に浮き彫りされる。

振り返ると、外国語改革ということで、言語学的教育も文学的教育も無価値とするような、つまり、会話能力の育成を至上目標とする「実用主義」的教育実践が、一般教育科目「文学」の軽視と相まって、唱導されるように感じ始めて、「立命よ、おまえもか」と慨嘆の日々が始まったのは80年代末だったか。外国語教員「籍」の者は専門ゼミ・専門科目を担当しても特任教授にはしないという差別制度のおかげで、非常勤講師の処遇の問題点も認識出来るようになったのだが、名誉教授の称号はもらえたから、からくも愛想が尽きるには至らなかったのだ。

違和感を覚えたのに、「ベスト・ユニヴァーシティー」のスローガンもあった。「早稲田に追いつき追い越せ」は、点数主義・競争主義の宣揚であった。アジア太平洋大学の設立で、名だたる大企業のCEOがずらりと「アドバイザリー・コミティー」に名を連ねる壮観に、財と官の掌に乗る最高学府に墮すのではないかと案じたものだった。

北大路の小学校開校式に出席した。好奇心からだ。高級感が充満していて唾然。後日、給食は琵琶湖岸のホテルに委託するとの新聞記事に慄然。APUで講師解雇問題発生など、非常勤講師組合の機関紙に報道される立命館にも、民主主義の衰退を感じて悄然。校友会誌に写真をとるので朱雀キャンパスに行つて、親しみはもちろん温かみが毫も感じられない玄関ホールに呆然。事務室エリアの廊下を歩いても高踏的で閉鎖的なムードしか感じない。「ああ、立命は 遠くにありて想うもの」。

1969年5月、わだつみ像が、角材を振り回す赤ヘル（メット）集団に破壊されるのを目撃して、彼らと彼らの蛮行をただ見ているだけの機動隊に、「正体見たり」と怒りを抑えられなかった時から数日後、教職員組合委員長になった僕。荒涼とした広小路キャンパスの中で、武藤総長事務取扱や細野武男先生たちを前にしての「業務協議会（略称：業協）」は実に気が重かった。暴力一掃・学生諸君の安全保障、施設設備の復旧・整備、教職員の教育・研究・労働条件の確保、すべては学園あげての焦眉の課題。立場の違いから立論の対立はあっても、しかし、理事会は教職員の総意に依拠する根本姿勢を崩さなかった。立命館民主主義は、学園存亡の未曾有の危機にあつて、持続的創造力を保持していた。

過去を記憶し、伝え、教訓を学び取る、これが、個人であれ団体であれ、未来を切り拓くのに不可欠な試練なのだと想う。僕の生涯のほぼ半分は立命館大学を軸に費やされた。就任

の折の末川博総長の言葉も表情も、千金の重みで僕を支えてきたのだ。
だから、やっぱり、近年の立命の真正の民主主義からの逸脱に深く憂慮するのだ。

【私の意見 9】

立命館の進む道

友藤 信明(2007年3月定年退職)

「一流大学」志向の落とし穴

「早稲田・慶応に追いつき、一流大学にならないと駄目である」と、学園トップの川本相談役や長田理事長は標語のように長年に亘って繰り返してきた。この「標語」は分かりやすく、異議をと
なえにくく、「幹部職員」から教職員に浸透した。

しかし、この「標語」を学園トップが一面的に唱え続けることには、大きな落とし穴が潜んでい
た。「標語」が“錦の御旗”のように言われることで、戦後の立命館が築きあげてきた最も大切な
本学の理念、目的、民主的諸制度が歪められてきている。

1979年の全学協を経て、相対的低学費を維持しながら学園の継続的・計画的発展を維持するた
めにと「ダブルスライド制」学費方式が採用された。学園挙げての公費助成運動が全国に拡がり、
経常費の二分の一助成が法制化され、助成増額分の半額が「 $-\alpha$ 」として学費減額に作用するとい
う、この学費方式はその時点では妥当性あるものであった。しかし、二分の一助成が反故にされる
に至り、「立命館大学が、国の高学費政策を変えさせ得る影響力を持つ、一流大学にならなくては
駄目だ」と、1980年代後半にかけて、本学はこうした一流大学志向へと進んでいった。この一流
大学の意図するところは、“平和と民主主義”を教学理念とする立命館こそが、国民と社会が求め
る教育と研究において我国のトップレベルとなり、併せて、私学高学費に歯止めをかけ、国民のた
めの大学教育を実現することにあつた。

しかし、その後、学園トップは落とし穴へと足を踏み込んでしまったのである。手段であったはず
の「一流大学になる」ことを目的にし、あれもこれもランキングで測るようになってしまった。
そして、文部科学省の計画を先取りして、如何に他大学に先んじるかを競うようになり、とうとう
相対的低学費政策をも放棄してしまった。次には、必要以上に競争をかきたて、その必然的帰結と
して成果主義へと突き進んでしまった。

では、学園トップの言う「一流大学」とはどのような大学を言うのであろうか。本学での共通の
認識は無い。それはそのはずで、全学議論も、ましてや全学合意などは無い。上記のような経過で、
早稲田・慶応に追いつくことや、全国一位になることが即「一流大学」であるかのように、学園ト
ップが誘導してきたのである。

立命館が目指す“一流大学”は、そのような浅薄なものでは決して無い。少なくとも、平和と民
主主義を教学理念とする本学に相応しく、人類史的課題に応える教育研究で国際的研究をリードす
る等の崇高な理想を掲げ、民主的諸制度をさらに発展させ、あるいは開発し、全学構成員の英知と
創造的エネルギーを総合的に結集する大学創造が、“一流大学”の前提であろう。また、それが立
命館の真に目指すべき一流大学・一流学園の方向であろう。このような前提や方向もなく、そして、
トップの暴走を許さない教職員の力なくしては、規模や増加率など幾つかの指標で全国一位を占め
ることに右往左往する「一流大学」像を背負い込むことになるだろう。

相対的低学費と学費の重み

「他大学より優れた教育であれば学費が同じでも相対的低学費である」などという本質を理解しない屁理屈でもって、相対的低学費政策を放棄したことは、「日本型私学の矛盾構造」を免罪し、学費の重みを常に意識した民主的財政運営からの逸脱に繋がる。個別一私学のみで長期に相対的低学費を堅持するには限界があるが、日本の高等教育政策の貧困さに起因する私学高学費の下で、公費助成要請運動と合わせて、本学が全学の力で相対的低学費政策を維持することは、値上げを抑制する重要な意味を持つ。

“学費の重み”というキーワードを耳にしなくなった頃から、必要以上にホテルでの催しが増えたこと、理事長・総長等主催の来賓との料亭での会食が高級化・高額化したこと等、気付くだけでもいくつかの変化が目につく。APU開学に際しての来賓に対する接遇は、利潤追求のためには接待攻勢が当り前の企業などとは異なり、学生の学費で成り立っている私学では、誰が見ても過度のものであった。相対的低学費政策を維持していた頃には、学費の重みを意識し、このようなことは無かった。二部勤労学生がいなくなり、高学費となった下で低所得者層の学生が少なくなり、学費値上げ反対の学生・父母の声を聴こうとしなくなったのと表裏のようである。相対的低学費を維持していた時期に比べ、学園財政は確実に好転してきた。しかし、一方で無用な無駄遣いが始まり、他方で教職員の賃金が10大学中で下位となり、あろうことか、一方的な一時金カットが断行された。

この一時金カットは、有能な経営者だからできる先を見越した英断であり、他のどの私学も出来ないものとして、経済界や文部科学省から高い評価を受けた。しかし、良心ある教育界や、なによりも父母・学生からの評価を最も大切にすべきではないのか。経済界や文部科学省からの評価を第一義的に考え、その評価の対価として退任慰労金倍増化をお手盛りしたことを知り、リーダーとして信頼し尊敬していただけないに残念でならない。

「日本型私学の矛盾構造」改善のためにも、相対的低学費政策を堅持し、ガラス張りの財政政策と財政努力を教職員に示し、真に学生・教職員を大切に、教職員に依拠した中長期計画を進めるための納得の出来る一時金カットであるなら、「やむなし」とすることもありうる。しかし、近年の財政執行状況は、学費の重みとは無縁であり、財政民主化の観点から不透明に思えるものも見られ、とても説明責任を果たしているとはいえない状況である。(2006年10月、組合が理事会に業務協議会の再開と説明責任を求めている時、前理事長は「国立マネジメント研究会－北海道－」で、1カ月カットを喧伝していたのである。－「改革の哲学」47～48P参照：総務部発行)

経営主義的な評価制度は教育研究現場にとって有害

成果を挙げ評価されることは、それ自体が喜びである。成果の喜びを職場の仲間と共有することは、新たなエネルギーを生み、積極的な評価は教職員全体を励まし、士気を高める。しかし、これを制度として処遇にリンクさせて行うなどの、経営主義的な安易な評価制度の導入は、逆に様々な弊害をもたらす。職員職場の業務は多種多様であり、学生援助業務などは面倒なことも多く、地味で成果として現れにくく、評価されることも少ない。しかし、誰かが見ていなくても、評価されにくくとも、やらねばならない大切な業務もある。学部事務室での新学期など繁忙期の学生対応は、数の多さもさることながら、面倒に感じてしまいがちである。職員の無意識に行う横柄な対応が学生の信頼を無くすことも珍しくない。でも、繁忙期こそ職員にとって教育現場で働く意味と喜びを最も感じ、経験と教訓を交流し、お互いに成長する絶好のチャンスである。だが、成果が問われ、評価を受けるといった状況の下では、担当業務での個人の評価を高めることに目を奪われ、着実に成

長するチャンスを潰してしまうことになる危険性が高くなる。

本学では、職員が全力で業務に当たり、厳しい相互批判を通して成長することを重視し、業務会議という素晴らしい制度を先輩たちが作ってくれている。しかし、優れた制度であるのに近年その機能が低下の一途をたどっている。原因は様々にあるが、成果主義・評価制度への傾斜が大きな要因であることに間違いは無い。あるべき管理職像が、評価制度導入により大きく変化し、下位者の描く像と上位者の描く像とに大きな乖離が生じている。さらに、成果主義・評価制度が一般職員まで導入されると、中間管理職は本来の職責以外に、不本意な成果の評価業務まで付加されることになる。職場で課員は団結するどころか、議論すらしなくなってきている現状をさらに深刻なものにする。上司から受ける評価を意識して、上司に対する適切な批判などは出来なくなってしまふ。信頼と協働を前提とした業務会議での相互批判などは無くなり、本学の強みとしてきた、個人と集団の学習と力量を高める職場機能は、弱体化を避けられない状況になってきている。

民主主義こそ確かな力

民主的な議論を通じ合意した政策や計画は、教職員の一致協力した奮闘によって、困難な課題であっても実現してきた。しかし、近年、とみに民主的な議論や手続きが軽視されてきている。

これまで先輩たちが築いてきた民主的諸制度を、活かし、前進させ、改革にも繋げる世代を超えた取り組みは、構成員のレベルアップと成長をはかる営みであり、また、教育職場での計画や課題達成への実践力であり、さらに、民主主義をより豊かなものにし、取り組みを豊かにするものである。これは、簡単なことではない。すべての構成員の高い志と学習と粘り強い取り組みが求められ、なかんずく、組織運営の指導者には、民主主義を体現できる見識、人格、素養が求められる。

しかし、学びあい、育てあう教育の場においては、民主主義の器を磨き、民主主義の担い手を育てることは、決して無理で不可能なことではない。むしろ、今日、声高に言われている教養教育の本質の一つがここにあるとも言える。学生を含めて民主主義の担い手を育てることは、将来の持続的発展に大きな力を発揮する最も確かな道だと思う。

“平和と民主主義”を教学理念とすることは、世界に誇るべきことである。その立命館が進むべき道を決して誤ってはならない。学園は、民主主義の大道を、面倒で遠回りであっても、時に霧に閉ざされようとも、足音高く、より確かに大道を切り開き、進んで行ってほしいと願う。

賛同者(50音順)

[2008年3月25日現在]

朝日 稔、芦田 文夫、荒川 重勝、安藤 哲生、**井川 定雄**、石田 昌幸、石飛 幸子、伊藤 堅二、伊藤 武夫、井上 純一、岩井 忠熊、**梅田 四郎**、岡尾 恵市、奥地 正、奥村 功、小野 一郎、**恩田 良昭**、笥 文生、香積 学、加藤 直樹、川上 勉、菊井 禮次、**栗山 崇**、桑原 博昭、小檜山 政克、**小村 英一**、坂田 典子、坂野 光俊、阪本 欣三郎、佐々木 嬉代三、佐藤 嘉一、杉野 圀明、須田 稔、**園田 充則**、**高内 俊一**、高木 彰、**高橋 悠**、**田坂 和美**、田中 宏道、辻村 寛、**津田 孝司**、堤 矩之、戸木田 嘉久、友藤 信明、**中村 泰行**、**中山 康之**、永原 誠、**夏原 嘉弘**、浪江 巖、廣末 良子、藤原 莊介、二場 邦彦、**松田 全功**、**南 直樹**、宮澤 正男、三好 正巳、森野 勝好、山口 幸二、**山下 弘**、**山辺 昌彦**、山本 岩夫、**両角 正子**、**若井 勉**、**和田 武**

※太字は、第1回フォーラム後に賛同者になられた方です。

賛同者合計数：75名(匿名11名含む)

《私もひとこと》

井川 定雄（元総務担当常務理事）

私は1987年度に定年退職してから20年、孫の成長を見つめるが如く立命館学園を見守ってきました。「地球市民宣言」や「学園憲章」に掲げる立命館の理念と実践を誇らしく思っています。

さて私が立命館に在職の時と現在とでは、時代は大きく変化してきていると思います。とりわけ、地球温暖化問題、憲法改定を中心とする平和問題、労働問題特に若い人達の夢と希望、学問の研究・教育の問題、年寄りに優しい政治・社会等枚挙にいとまないほどです。

それらの中で、まずは地球温暖化問題について、世界の取り組みが進んでいますが、次のような提言があります。「温暖化による最悪の影響を回避するため、温室効果ガスを2050年までに80%削減する必要があります。そこで大学の使命はカーボンニュートラルの達成のため、学生達に知識を与え、社会の見本となり、地域社会を導くこと」にあると。そこでまず私達の大学として①学内でのよびかけ ②他大学へのよびかけ ③わが国の国際的貢献を積極的に進められることこそ大事であると考えます。

以上のイニシアティブの役割を総長はじめ学園関係者に要請したいと思います。

【編集後記】

昨年は、“ハンカチ王子”や“ハニカミ王子”や松井以来の“スラッガー中田”などスポーツ界で活躍する若手が世論を湧かした。

学園では多くの教職員の声に耳を傾けない“裸の王様たち”が、“退任慰労金倍額決定”や“感謝のつどいの連発”“叙勲の受賞”と続いたことに、「いつ頃から変質してきたのか」「2001年APU開設だ」「いやもっと前からだよ」と学内外の世論が彷彿とした。

『冊子「改革の哲学」(発行2007.3 総務部)』には、「どんな相手だろうと、その意見や批判に聞く耳を持たないといけません。・・・我慢も必要です」とある。高僧と対談をしながらも、実り多き稲穂の如くにはなれず、短気を美德とするような学園トップ層の態度に情けない思いがする今日この頃である。

その思いを払拭すべく、12月22日結成時41名であった「考える会」の賛同者は、今や井川元総務担当常務理事を含め70名を超えた。さらに現役教職員や立命館に深い関わりを持つ方々から、是非支援・協力したいので、元教職員の制限をはずして欲しいとの声を受け、世話人会は「賛同者」の新たな申し合わせを確認した。(M・H)

事務局連絡先：

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学教職員組合 気付
「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」

TEL:075-465-8200（宮澤気付） FAX:075-465-8201

メールアドレス rits.democracy@gmail.com

ホームページアドレス <http://rits-democracy.blogspot.com/>